

# きょうだいの有無によるきょうだい意識と友人関係の違い

## Differences of Sibling Cognition and Friend Relationships between Students with Siblings and without Siblings

磯崎 三喜年 ISOZAKI, Mikitoshi

● 国際基督教大学  
International Christian University

ナルデッシ, マルコ NARDUCCI, Marco

● 国際基督教大学教育学研究科  
Graduate School of Education, International Christian University



Keywords

きょうだい意識, 一人っ子, 友人関係, 自己評価

sibling cognition, only child, friend relationships, self-evaluation

### ABSTRACT

本研究は、性、きょうだいの有無、および年齢段階が、きょうだい意識と友人関係に及ぼす効果について検討した。参加者は、公立中学校の生徒717名（男375名、女342名）、公立高校の生徒376名（男230名、女146名）および大学生83名（男24名、女59名）であった。これらの参加者に対し、質問紙調査を実施した。参加者は、きょうだい意識と友人関係に関するいくつかの質問項目、およびスポーツや自己にとって関与度の高い教科のできぐあいなどについて、5段階評定を行った。性、きょうだいの有無、年齢段階の多変量分散分析の結果、性、きょうだいの有無、年齢段階の主効果が有意となった。また、性ときょうだいの有無、および性と年齢段階の交互作用が有意となった。女子は、男子よりもきょうだい関係をより肯定的に捉えていた。また、一人っ子はきょうだいがいる人よりも、関与度の高いことがらにおいて、友人よりも優れていると自らを捉えていた。これに対し、きょうだいのいる人は、一人っ子が一人っ子であることを肯定する度合いより、きょうだいのいることをより肯定的に捉えていた。さらに、年齢段階が上がると、きょうだい関係をより肯定的に捉え、自己を友人と比し、より

肯定的に捉える傾向が示された。これらの結果から、きょうだいの有無と自己評価、友人関係との密接な関わりについて考察がなされた。

The effect of presence or absence of siblings, sex, and age level on the cognition of sibling relationships and friend relationships was examined. The participants were 717 (375 male, 342 female) Japanese public junior high school children, 376 (230 male, 146 female) Japanese public high school students, and 83 (24 male, 59 female) Japanese private university students. Participants were asked to respond to various items on a questionnaire related to their sibling cognition and friend relationships. In addition, each participant was asked to answer the following questions: “How successful are you in the following: being good at sports, performing well on a highly self-relevant subject? etc.” Participants rated each item using a 5-point scale. Data were analyzed using the MANOVA procedure (sex, presence or absence of siblings, and age level: junior high school, high school, university). The results indicated that the main effects of sex, presence or absence of siblings, and age level were statistically significant (using Wilks’ Lambda). An interaction effect between sex and presence or absence of siblings and between sex and age level was found, using Wilks’ Lambda. Female respondents perceived their sibling relationships more positively than male respondents. Respondents with no siblings rated themselves better than respondents with siblings on a highly self-relevant activity. On the other hand, respondents with siblings perceived the presence of siblings more positively than respondents who had no siblings perceived being an only child. The implications of these results for the nature of relationships between siblings and friends are discussed.

## 1. 問題

きょうだいとは、不思議な存在である。多くの場合、すでに所与のものとして関係が形成されており、友人関係のように選択的なものではない。また、親密でありながら、身近であるがゆえに、ときとしてライバル意識や葛藤、軋轢を生じさせる存在でもある (Tesser, 1980)。

特に、スポーツの世界では、概して年下のきょうだいの実績が、年上のきょうだいより優れていることが多く、その理由についてもさまざまな視点から検討がなされている。例えば、Sulloway & Zweigenhaft (2010) は、アメリカの大リーグに在籍したきょうだいを年上、年下の組み合わせによって検討した。そして、メジャーでの在籍期間、出場試合数、打者として得た四球の数、ホームラン数、死球を受けた数、盗塁数、盗塁成功率、などにおいて、年下のきょうだいの方が優れた実績を上げていたことを明らかにしている。

そして、投手と野手を合わせた全体 (682ペア)

と比較すると、年下は年上より1.9年長く在籍し、出場試合数も年下の方が162試合多い。盗塁数や死球の数なども年下の方が多。こうした優れた打撃成績、盗塁数の多さが、在籍期間の長さにつながっており、リスクを恐れず挑戦する傾向が、年下の方がより強いと指摘している。

また、古典的な Schachter (1959) の研究によれば、恐怖に駆られた長子や一人っ子は、中間子や末っ子よりも他者と親和しやすいという。長子や一人っ子は、親との間で自己の特性を把握する必要があり、自己概念が曖昧になりがちなためとの指摘もなされている。

しかし、少子化とされる今日では、長子と一人っ子をこうした視点で捉えることが妥当かどうか、議論の余地を残している。確かに、長子は、自己を親に近づけ、次子とは異なる存在として自分を捉えがちであるが、一人っ子の特徴については、改めて心理学的な検討が必要であると思われる。

このように、きょうだい関係は、興味深いものではあるが、我が国の家族関係の実証的研究にお

いては、親子関係や夫婦関係と比較して、きょうだい関係の研究は少ないとされている(白佐, 2006)。きょうだい関係には、複雑な諸要因が絡んでおり、そのことが研究の困難さを生むことにつながっている。

また、白佐(2004)は、きょうだい同士の関係は、幼少期から高齢期まで発達的に変化し、発達段階の各時期において異なった関係を形成するという。そして、これらの変化のプロセスや各段階の特徴を明らかにするような研究は、まだほとんどなされていないと指摘している。これは、今日のような少子化の時代において、より重要な意味を持つ指摘である。

きょうだいの存在は、個人の自己意識の形成や自己評価に影響を及ぼし、対人関係の基盤をなすものと考えられる。さらに言えば、人生の各段階において、重要な意思決定を行い、その将来を形成する上でも大きな役割を果たすと言える。

年齢段階によって、きょうだい関係やきょうだい意識はどのように変化するか、また、それはどのような要因によって規定されるか、その心理機制を捉えることが必要となる。

こうした視点から行われた中学生から大学生を対象とした研究(磯崎, 2007)では、年齢段階が上がるにつれて、きょうだい関係の認知はより好ましいものとなること、また、年下のきょうだいですが、そして男子より女子の方が、きょうだいの存在を肯定的に捉えていることが示された。

また、年上のきょうだいは、年下のきょうだいに對し、自己との類似性を低く評定し、心理的に距離をおきがちである。これに對し、年下のきょうだいは、年上のきょうだいを自己に近づけて捉えようとする傾向がある。

このように、きょうだい意識は、出生順位、性別、そして発達段階など、多様な要因によって変化がみられ、こうした変化の背景をなす統一的な視点からの説明が求められている。

年齢段階に伴うきょうだい関係の変化には、社会化による心理的成熟も関わっている。成熟とともに、対人的な技能も獲得し、適度な距離を保ちながら関係を形成、維持することができるように

なる。さらには、きょうだいとの差異化を図りつつ、互いを客観視できるようになる脱同一視のメカニズムも関わっていると推測される。

実際、年齢とともに得意分野での達成レベルが上がり、自己肯定化がなされやすくなることが示唆されている(磯崎, 2007)。つまり、自己の得意領域や志向性がきょうだい間で細分化し差異化する、いわゆる棲み分けが生起し、結果として互いを尊重しやすくなる可能性が考えられる。

では、友人関係はどうだろうか。友人関係は、選択的な関係であり、年齢段階が上がるとともに、その広がりや深さを増してくる。きょうだい関係は、友人関係とも密接に関わっており、それらは、相互に影響を与えつつ進展していくと考えられる。

実際、自己ときょうだいに対する捉え方は、友人関係における自己と友人に対する捉え方にも反映していることが指摘されている(磯崎, 2008)。こうした自己と友人やきょうだいに対する評価に関して、Tesser(1984)は、自己評価維持(self-evaluation maintenance: SEM)モデルによって、興味深い視点を提供している。このモデルの論点をなす自己評価維持が可能となるきょうだい関係、友人関係は、自己肯定とともに、より好ましい対人関係を形成する基礎をなしていると考えられる。

また、SEMモデルを発展させたBeach & Tesser(1995)の拡張自己評価維持(extended self-evaluation maintenance: ESEM)モデルの考え方は、自己と他者との相互肯定に基づくより親密な対人関係を考察する上で、貴重な論点を提出している。

ところで、これまで、きょうだいのいる人だけを取り上げて、そのきょうだい意識やきょうだい関係を取り上げてきた。しかし、少子化とされる今日、一人っ子の存在も注目されてきている。そもそも一人っ子は、きょうだいの存在について、あるいは、きょうだいのいないことをどう捉えているのだろうか。一人っ子であることを肯定しつつも、きょうだいの存在を望んでいるようにも思われる。

また、一人っ子ときょうだいのいる人では、友人関係や、自己と友人に対する捉え方などに違い

が見られるかもしれない。一人っ子の対他者関係は、きょうだいのいる人と何らかの違いが見られるのか。さらには、きょうだいのいないことが友人関係に何らかの影響を与えているのか。また、そうだとすれば、それはなぜなのか。興味深い。

こうした視点から、本研究では、きょうだいのいる人と、きょうだいのいない人（一人っ子）で、きょうだいについての意識や友人関係、自己と友人に対する捉え方にどのような違いが見られるかを検討することを目的とする。一人っ子が、一人っ子であることを受容する程度と、きょうだいのいる人が、きょうだいの存在を肯定する度合い、そして、きょうだいのいることと一人っ子であることが、自己に対する捉え方や友人関係にどう影響するかは、社会化と適応に関する基本的課題でもある。

ここでは、きょうだいの有無によるきょうだいについての意識の違い、そしてそれが友人関係に与える影響について、自己と友人に対する捉え方の視点を中心に検討することにした。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

公立の中学生717名（男375名，女342名）、公立の高校生376名（男230名，女146名）、私立大学生83名（男24名，女59名）を対象に質問紙調査（きょうだいのいる人用と一人っ子用の2種類の質問紙）を行った。なお、中・高校生は、各クラス担任によって調査が実施された。

### 2.2 質問項目（1）きょうだいのいる人

きょうだいのいる人用の質問紙を配布し、回答者の属性（性，年齢），きょうだい数を尋ねた。二人きょうだいの場合は、きょうだい関係についての意識，自己と友人に対する捉え方およびその他関連項目に回答を求めた。三人きょうだい以上の場合，回答者にとって年齢の近いきょうだいを一人取り上げ，二人きょうだいの場合と同様回答を求めた。ここで，年齢差が同じきょうだい二人いる場合は，いずれかのきょうだいを任意に取

り上げてもらい，同様に回答を求めた。また，ここでの友人とは，「最も一緒にいたいと思う友人」を一人思い浮かべてもらい，その友人と自己との関係および自己と友人に対するいくつかの評定項目に回答を求めた。

質問項目は，きょうだいについての意識に関する項目（4項目5段階評定：「5」に近づくほどポジティブ），さまざまな活動内容に対する自己にとっての重要性を尋ねる項目（5項目5段階評定），友人関係に関する項目（6項目5段階評定），自己と友人についての評定項目（8項目5段階評定：「3」が中間点，「1」に近づくほど友人評定が高く，「5」に近づくほど自己評定が高い），その他1項目（親和性に関する項目）から成っていた。

(2) きょうだいのいない人 きょうだいのいない人には，一人っ子用の質問紙を配布し，同様に5段階で回答を求めた。質問項目は，きょうだいのいる人に準じたものであるが，一人っ子用に，必要に応じ変更を加えた（例えば，「きょうだいがいてよかった」を「一人っ子でよかった」など）。

## 3. 結果

有効回答は，1052名（男554名，女498名）。このうち，きょうだいのいる人975名，一人っ子77名であった。また，中学生638名，高校生335名，大学生79名であった。

きょうだいについての意識，自己ときょうだいに対する評定，自己と友人に対する評定について，回答者の性，きょうだいの有無，年齢段階（中学生，高校生，大学生），の多変量分散分析を行った。その結果，回答者の性（ $F(24, 1017)=4.54, p<.001, Wilks' \Lambda=.90$ ），きょうだいの有無（ $F(24, 1017)=2.85, p<.001, Wilks' \Lambda=.94$ ），年齢段階（ $F(48, 2034)=2.11, p<.001, Wilks' \Lambda=.91$ ）の主効果が有意となった。また，性ときょうだいの有無（ $F(24, 1017)=1.87, p<.01, Wilks' \Lambda=.96$ ），性と年齢段階の交互作用（ $F(48, 2034)=1.53, p<.05, Wilks' \Lambda=.93$ ）が有意となった。

表1 性別に見たきょうだい意識と友人関係の評定

	男子	女子
困ったとき、人と一緒にいたい	3.11(.14)	4.03(.13)***
自分の上にもっときょうだいがいたらよかった	2.97(.16)	3.73(.15)***
最も得意なスポーツの重要性	3.68(.14)	2.86(.13)***
最も得意な芸術の重要性	3.17(.13)	3.54(.12)*
友人と考え方が似ている	3.15(.13)	3.60(.12)**
友人のすばらしさを感じる	4.15(.10)	4.60(.09)**
友人の手助けをする	3.99(.11)	4.28(.10)*
友人に助けをもらう	4.11(.10)	4.59(.10)**
友人に相談する	3.55(.13)	4.50(.12)***
友だちづきあいの重要性	4.11(.10)	4.37(.09)*
得意な運動における自己評定	3.89(.15)	3.47(.14)*

注1: 数値は推定周辺平均、( )内は標準誤差を示す  
 注2: \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

これらの結果にもとづき、各要因の一変量分析を行い、その検定結果（推定周辺平均）を以下に示した。

### 3.1 性別に見たきょうだい意識と友人関係の評定

表1より、性別では、女子の方が、自分の上にもっときょうだいがいることを望み、友人および友人との関係をより肯定的に捉えていた。男子は、得意な運動において友人と比較した自己評定が女子より高い。

### 3.2 きょうだいの有無別に見たきょうだい意識と友人関係の評定

表2より、きょうだいの有無で見ると、一人っ子の方が、一人っ子であることを気楽と捉えている。その一方で、自分の上にもっときょうだいがいたらよかったとする度合いは、きょうだいのいる人よりも強い。また、自分の下にもっときょうだいがいたらよかったとする度合いは、きょうだいの有無にか

かわらず、それほど高くない。きょうだいのいる人は、一人っ子が一人っ子でよかったとする度合いよりも、きょうだいがいてよかったとする度合いが大きい。

表2 きょうだいの有無別きょうだい意識と友人関係の評定

	きょうだいあり	一人っ子
一人っ子は気楽だ	2.74(.07)	3.07(.18)***
きょうだいがいて(一人っ子で)よかった	3.95(.06)	3.58(.16)*
自分の上にもっときょうだいがいたらよかった	3.04(.08)	3.66(.20)**
自分の下にもっときょうだいがいたらよかった	2.80(.07)	2.95(.20)ns
最も得意なことの重要性	4.37(.05)	4.65(.13)*
最も得意なことの自己評定	3.48(.06)	3.98(.17)**

注1: 数値は推定周辺平均、( )内は標準誤差を示す  
 注2: \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表3 年齢段階別に見たきょうだい意識と友人関係の評定

	中学生	高校生	大学生
きょうだいがいて(一人っ子で)よかった	3.48(.09)a	3.73(.14)ab	4.10(.20)b*
最も得意なスポーツの重要性	3.62(.09)a	2.99(.16)b	3.20(.22)ab*
その友人が好き	4.32(.07)a	4.58(.11)ab	4.79(.15)b*
最も得意な運動におけるできぐあいの自己評定	3.41(.10)a	3.56(.17)ab	4.06(.23)b*
最も得意な教科におけるできぐあいの自己評定	3.22(.11)a	3.51(.18)ab	3.87(.24)b*
最も得意な芸術におけるできぐあいの自己評定	3.15(.09)a	3.18(.16)a	3.91(.22)b*

注1: 数値は推定周辺平均、( )内は標準誤差を示す  
 注2: 異なるサブスクリプト間に有意差があることを示す、\* $p < .05$

また、一人っ子は、自己にとって最も得意なことの重要性をきょうだいがいる人より高く評定し、友人と比較したそのできぐあいの自己評定も、きょうだいのいる人より高い。

### 3.3 年齢段階別に見たきょうだい意識と友人関係の評定

表3より、年齢段階別で見ると、きょうだいがいて、あるいは一人っ子でよかったとする度合いは、中学生より大学生でより強まっている。ただし、一人っ子だけを取り上げると、その評定値(一人っ子でよかった)は、中学生3.26(.16)、高校生3.59(.27)、大学生3.90(.35)であり、きょうだいのいる人が、きょうだいがいてよかったとする度合いほど大きくはない。

また、最も得意なスポーツの重要性は、中学生が高い。しかし、友人と比較した得意な運動におけるできぐあいの自己評定は、中学生より大学生の方が高い。最も得意な教科、最も得意な芸術のできぐあいも同様な結果となっている。友人が好きという度合いも中学生より大学生が高い。

### 3.4 性ときょうだいの有無別に見たきょうだい意識

表4 性ときょうだいの有無によるきょうだい意識の違い

	きょうだいあり	一人っ子
きょうだいがいて(一人っ子で)よかった		
男子	3.73(.10)	3.88(.23)
女子	4.17(.07)	3.28(.22)**

注1:数値は推定周辺平均、( )内は標準誤差を示す

注2:\*\* $p<.01$

表4より、性別に見た場合、女子は、一人っ子であることにそれほど満足しておらず、きょうだいのいる人が、きょうだいがいてよかったとする度合いには及ばない。これに対し男子は、一人っ子であることにある程度満足しており、きょうだ

いのいる人が、きょうだいがいてよかったと思う度合いと差が見られない。

## 4. 考察

### 4.1 性別に見たきょうだいについての意識と友人関係

女子は困ったとき、人と一緒にいたいと思うとともに、年上のきょうだいを望む度合いが強い。これは、女子の親和性の強さ(Schachter, 1959)と関連し、それが、きょうだいだけでなく、友人とのつながり意識の強さ(友人のすばらしさを感じ、援助と被援助の関係をより強く持ち、相談をし、友だちづきあいを重視する)にも反映しているように思われる。関係性を重視しがちな女子の特性が示唆される。

男子は、得意なスポーツにおけるできぐあいにに関して、自己を友人より高く評定し、友だちと親和的でありつつも、達成的な側面で友人との差異化を図っている様子がうかがえる。こうした、男子の差異化傾向の強さは、Tesser, Campbell & Smith (1984) や磯崎・高橋(1988)とも符合する。また、男女でスポーツの重要性和芸術の重要性が分かれ、対照的な点は興味深い。これは、社会化の過程において、男女の志向性が異なっていることを示唆している。

### 4.2 きょうだいの有無によるきょうだいについての意識や友人関係の違い

きょうだいのいる人は、きょうだいのいない一人っ子をそれほど気楽な存在ではないと考えている。また、きょうだいのいる人は、一人っ子が一人っ子であることを肯定し満足する度合いよりも、きょうだいがいることをより肯定し、満足感を感じている。

きょうだいのいる人は、葛藤や軋轢を感じることもあるにせよ、きょうだいの存在を肯定しており、またそのよさ、メリットを感じているようである。

こうした、きょうだいのありがたみは、年齢段階とともに強まる傾向にある(表3)。一人っ子

も、一人っ子であることを肯定し、受け入れている。その意味で、きょうだいの有無にかかわらず、自己のおかれた状況を肯定している様子が伺える。ただし、一人っ子の肯定度は、きょうだいのいる人が感じるよさには及ばない。

興味深いのは、一人っ子は、自己の最も得意とすることをきょうだいのいる人よりも重視し、そのできぐあいを友人と比較した際の自己評定も、きょうだいがいる人より高い。つまり、一人っ子は、自己にとって重要なことがらに対しより強くコミットし、またより強い自信を持っていることがわかる。その意味で、一人っ子は、きょうだいのいる人より、強い自己の中心核を持っており、それが、友人関係にも反映しているように思われる。

この点から見ると、Schachter (1959) の研究から示される一人っ子と長子を類似した存在と捉える視点は、必ずしも妥当ではないように思われる。こうした一人っ子と長子の差異については、さらなる実証的な検討が望まれる。

きょうだいの有無を男女別に見た場合、女子は男子より、一人っ子であることを肯定しきれていない。また、きょうだいのいる女子は、きょうだいがいることをより肯定的に捉え、満足感がより高くなっている(表4)。これは、きょうだい関係の認知が、年齢段階とともにより好ましいものとなること、そして女子でより肯定的であることと符合し(磯崎, 2007)、きょうだいとの関係をより長いスパンで維持しようとする女子の特性を示しているようにも思われる。

ところで、一人っ子は、もし自分にきょうだいがいたとしたらの質問に対し、自分より年上のきょうだいを望む傾向がある。年下のきょうだいをそれほど望まないのは、きょうだいのいる人、一人っ子でさほど変わらない。

このことは、きょうだい関係において、年下であることを肯定しやすい心理があるように思われる。磯崎(2007)は、年下のきょうだいは、年上のきょうだいのよさを認めやすいことを明らかにしているが、このことも年下のきょうだいを望むことと関連しているかもしれない。

つまり、年下のきょうだいにとって、年上のきょうだいは、自己の身近なモデルとして準拠枠となり、貴重な情報提供者となる。また、年下であることから、年長のきょうだいに対し、自らの劣勢を受け入れやすく、物事に比較的気楽に取り組むことができる。親や周囲の他者からの圧力も相対的には弱められる可能性がある。

表1のように、女子は男子に比べ、より年上のきょうだいの存在を望むが、これも女子の親和性と、年下のな役割や位置、さらにはそれに伴うある種の気楽さを好む傾向があることを示している。

対照的に、男子は、きょうだいの有無によって肯定感、満足感に差がみられない(表4)。男子は、相対的に親和性が低く、友人との間でも差異化意識、個別性意識が強い。これらの特性が、きょうだい意識にも関わっている可能性がある。

#### 4.3 年齢段階別に見たきょうだい意識と友人関係

全体としてみると、年齢の上昇とともに、きょうだいのよさを肯定的に捉えている。それは、友人評定にも反映し、年齢段階とともに友人への好意度も高くなっている。また、最も得意な運動、教科、芸術における評定は、そのいずれにおいても年齢段階が上がるとともに、友人と比べた自己の評定が上がり、自己を肯定しやすくなっている。

これは、Tesser (1984) のSEMモデル及び磯崎(1994)の発達の視点からの検討と符合している。このように、自己肯定感ときょうだいのよさや友人への好意度の高さは、相互に密接に関わっている。

つまり、こうした自己肯定感、年齢段階が上がるとともに、自己ときょうだいの相互肯定、そして、自己と友人の相互肯定が図られていく過程において成立すると言い換えることもできる。その意味で、Tesser (1984) の言う自己評価維持、あるいは、Beach & Tesser (1995) の拡張自己評価維持がその基礎を形作っているように思われる。この点については、今後のより詳細な研究が期待される。

## 引用文献

- Beach, S. R. H., & Tesser, A. (1995). Self-esteem and the extended self-evaluation maintenance model : The self in social context. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York : Plenum Press, pp. 145-170.
- 磯崎三喜年 (1994). 児童・生徒の自己評価維持機制的発達的变化と抑うつとの関連について 心理学研究, 65, 130-137.
- 磯崎三喜年 (2007). 出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響 社会科学ジャーナル, 61, COE特別号, 203-220.
- 磯崎三喜年 (2008). 青年期におけるきょうだい関係と友人関係 教育研究 (国際基督教大学), 50, 119-127.
- 磯崎三喜年・高橋 超 (1988). 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- Schachter, S. (1959). *The psychology of affiliation: Experimental studies of the sources of gregariousness*. California: Stanford University Press.
- 白佐俊憲 (2004). きょうだい関係とその関連領域の文献集成 III. 研究紹介編 川島書店
- 白佐俊憲 (2006). きょうだい研究の動向と課題 日本児童研究所 (編) 『児童心理学の進歩 2006年版』 金子書房 pp.57-84.
- Sulloway, F. J., & Zweigenhaft, R. L. (2010). Birth order and risk taking in athletics: A meta-analysis and study of major league baseball. *Personality and Social Psychology Review*, 14, 402-416.
- Tesser, A. (1980). Self-esteem maintenance in family dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 77-91.
- Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin(Eds.), *Boundary areas in Social and developmental psychology*. New York: Academic Press. pp.271-299.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.

## 謝辞

本研究のデータ分析に際して、ご協力いただいた小野寺孝義広島国際大学教授に感謝したい。